
時速33キロのエスケープ

高嶺

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

時速33キロのエスケープ

【Nコード】

N6649L

【作者名】

高嶺

【あらすじ】

盛夏を目前に控えたある日、高井隼人は高慢で有名な生徒会長、遠藤梓に声を掛けられた。

用件は「私を授業中にエスケープさせて欲しい」と言うものだった。

高井は、先端科学の教育への転用によって運用が確立されたアンドロイド教師との確執、成長の限界を突き付けられたことによる悔しさ、行き場のない感情のぶつけ先として、遠藤の依頼を受けることにして……

十一時三十四分五十秒。

四時間目の開始から十四分が経った。天気は快晴、体調は上々、空腹だけがちよつと気にかかるけど、その分身軽になったと考えればよししよう。

大きく一度息を吸ってゆっくりと吐く。

Set……Ready……

そして音もなく回転を続ける秒針が頂点に達した。十一時三十五分。

GO！

椅子を突き飛ばし、勢い良く立ち上がった俺は同級生達の注目を無視して駆けだした。

俺が立ち上がると同時に軽快に席を立った遠藤も、中央最前列の席から教室後方ドアへと向かって走り出す。

先にドアへと到着した俺はあらかじめ輪ゴムで縛っておいた親指を指紋認証部に突き付ける。

『体調不良を感知……解錠』

数年ぶりの裏ワザはまだ生きていた。認証機の上辺に付けられた液晶画面に狙い通りの文言が表示されている。よし！

叩きつけんばかりの勢いでドアを開き、遠藤の到着を待つ。ここまでは成功だ。

おいっ！

それにもかかわらず肝心の遠藤は何かに足を取られたのか俺の目前で盛大に転んだ。

液晶画面に表示された文字が点滅を始めた。まずい。このままじや閉まっちゃうぞ。

『異変』を認識した教師は甲高い電子音を鳴らしながら管理システムに異常を知らせ、俺たちの方へと向かってくる。

そしてせっかく開けたドアもゆっくりと閉まり始めていた。
ああもうつ！

もたつく遠藤の手を取り強引に立ち上がらせると、そのままその手を引っ張って走り出し、閉じかけのドアを通り抜ける。

こうして計画通り、俺たち二人は教室から抜け出した。

「高井君。あなたって不良？」

退屈な授業を終え、財布、携帯だけを収めた鞆を手に「さあ帰ろう」と立ち上がったところで突然そんな風に声を掛けられた。

「なんだよそれ」

不躰な質問の相手を確認して俺は驚いた。

「なんだよ生徒会長さん。俺の生活態度が気に入らないとでも言いに来たのか？」

百五十センチに届いているかどうか。そんな小さな身体に尊大な態度。遠藤梓は、分厚いメガネ越しに鋭い視線を俺にぶつけてくる。
「質問に答えて。あなたは不良なの？」

その華奢な身体のどこにそんな強引さを隠しているのか。

俺の言葉をあっさりと無視した遠藤は、相変わらずの高圧さで答えを迫る。

「まあなんだ。『良く不ず』って言うのが不良なのであれば、俺は不良かもしれないな」

実際その通りだった。遅刻の常習犯で成績は最下層。部活にも入らず適当に生きている俺は、一般的な生徒に比べて『出来が悪い』と認識されていることは間違いない。ましてや真面目が制服を着て歩いているような遠藤とは正反対の存在だろう。

「煮え切らない答え方ね。でもいいわ」

でも、どういったわけか遠藤はその答えにそこそこ満足したみた

いだった。

小中高と一貫進学校育ちのお嬢様。生徒会長であり同時にクラス委員。そんな遠藤の持つ『不良』のイメージは俺程度でも十分通用するくらい貧困なものらしい。

不良と言えば、染髪や制服の着崩しを始めとして、喧嘩や喫煙などの代名詞とも言える行為あつてもものだろう。俺はそんなものとは無縁だったから、変な話だけど自分を不良だなんて意識したことは一度もなかった。

不良なんて存在は、それこそもう古い映画やニュースの特集で見られないほど希少化してしまったという。俺自身も漫画で知っただけで実物を見たことはない。

それにはあの、いけ好かない先端科学の教育への導入が大きく関わっている。

俺が生まれる数年前に始まった教育改革は、その成果がメディアに取りざたされて徐々に全国へと広がっていった。その中でも人型講師の投入、通称アンドロイド教師の評価は極めて高く、俺が中学に入ると、もう校内には管理人仕事のための名ばかりの校長か、用務員くらいしか人間はいなかった。実質の生徒管理、システム管理は教頭型に一任されているからだ。

児童心理学を始め、長きに渡って積み重ねてきた教育論の粋を集めた人型教師は、各生徒の心理を巧みに誘導すると同時に、高いレベルの教育を体調や機嫌にとらわれず平等に行う事が出来る。

結果として落ちこぼれたり孤立したりしてしまう児童は激減し、国別学力ランキングも二位以下に大差を付けてのトップに躍り出た。その中でも体育タイプのアンドロイド教師は、その筋力、耐久力の高さから、教育論の粋を以ってしてもなおはみ出そうとする生徒たちをまとめる風紀担当を兼任し、その管理体制を完全なものとしている。

それに付け加えて校内の主要個所にセンサーを配置し、体温や血圧等を測ることで体調を常に把握し、教室内にカメラを設置するこ

とで不当な行為の監視まで行われているのだ。

その管理体制は、まるで生徒に首輪を付け番人に見張らせているかのようだ。

俺のいた小学校も、俺が卒業した翌年によく完全に先端科学教育体勢に移行したらしい。全国的に見ても最遅の導入だったとどこかで聞いた。

こうして教育の現場はアンドロイド教師が完全に支配した。俺が大好きだったあの子供好きな先生は、今はどこで何をしているんだろう。

良いことづくめと絶賛された先端科学教育だが、中学に入っすぐに起きたとある一件から俺は嫌いだっただ。

「高井君はどうしてこの学校に来たのかしら？」

どうしてこんな難関校に場違いな不良が来やがったんだ？ そう聞かれているのかと思った。でも、遠藤の姿勢には高慢さこそあれ邪なものは一切感じられなかった。むしろ「ただ興味があるから」そんな風に見える。

「腹が立ったからぶつただけだよ。勉強にさ。だから県トップのここに合格したらもうどうでも良くなった」

「ふーん。そうなんだ」

遠藤は相変わらずの上から目線でそう言った。

「ねえ。高井君にお願いがあるんだけど」

本当に、遠藤に何があったんだ？

学年トップの成績を品行方正の箔で飾った、プライドの高い真面目女子の代表みたいなやつが、よりによって最下層生徒の俺に頼みごとだなんて。明日は雨どころか教科書が降ってくるんじゃないか？

嘆息する俺を差し置いて、遠藤は校則丈のスカートのポケットから何やら紙きれを一枚取り出し俺に差し出した。

「エスケープしたいの。それも授業中に堂々と。手伝ってくれない？」

厚いメガネに短いお下げという飾りっ気一つない遠藤には、あま

りに不釣り合いな言葉だ。

「不良の高井君ならできるでしょう？」

何を言ってるんだコイツ。現状の管理体制がいかに強固か知って言ってるのか？

少なくとも俺を含め、中学高校の六年間で授業中に堂々とエスケープを成功させたやつなんて見たことも聞いたこともない。

しかも二人同時に。華奢な体躯の遠藤を連れて授業中に堂々と抜け出すなんて無謀にも程がある。

遠藤のあまりの不案内さに思わずため息がこぼれた。

さすがは傲岸不遜の会長様だ。

「はあ。やれやれ」

……それだつて言うのに、なぜか俺はその紙きれを受け取ってしまった。

「どうしてサボリなんかしたいんだ？」

「それは無事エスケープに成功したら説明するわ」

「ふーん」

「片道だけで結構よ。それはチケット代わり。よろしくね高井君」

そう言い残して遠藤は、俺を置き去りにし、無駄に優雅な所作でさつさと教室を後にした。

まるで契約さえ済んでしまえば用はないとばかりに。

……なるほど片道チケットってわけか。どうりでずいぶんと安い契約金なわけだ。

受け取った紙きれは学食の食券一枚、カレー大盛りだった。

こんな難題をあんな居丈高な言い方でこんな無理を押しつけるだなんて。まったく噂通りのやり口だ。

わりに合わないにもほどがある。

それだつて言うのにどういうわけか俺の気分はたかぶり始めていた。

盛夏も近く、同級生たちが進路の決定に悩んでいる中、あの真面目生徒会長の遠藤が俺に授業中のエスケープを頼んでくるなんて。

ただ退屈に過ごしてきた三年間だったのに。なぜだろう。何かで自分の中で引つ掛かる感覚。もう一度だけ挑んでみたくなってしまう。

大盛りカレー券をポケットへねじ込み、俺も遅れて教室を出る。いつのまにか進む足は勢い勇み、頭は早くもエスケープのことでいっぱいだった。

電子制御ドアが音もなく閉じる。

俺たち二人は無事、最初の関門である教室からの脱出を成功させた。

そのまま校舎奥側の階段を二階へと上がり、二年生の教室の並ぶ廊下を中央まで走る。

H型をしたうちの校舎は二階にしか向かいの校舎へと続く道がない。そこが次の関門になる。

「それにしても何で行き先が屋上なんだ？ 一階からなら外へ逃げの方が楽だろうに」

階段を駆け上がりながら俺は遠藤に疑問をぶつける。

「一度行ってみたかったの。立ち入り禁止でしょあそこ」

気軽に言ってくれるもんだ。

屋上まで続く階段は俺たちのいる西校舎から中央廊下を越えた向こう側の東校舎にしかない。要するに、かなりの距離を走破しなければ屋上にはたどり着かない。

「なるほどね……さて、最初の先生さまの登場だ」

中央廊下を挟んで反対側に教師の影を発見。

俺たちの行動は早くも校内中に通達され、各廊下から階段への境目、昇降口など、移動の要所に付けられたセンサーによって現在位置まで割り出されているはずだ。

おそらくこの現場の一番近くにいた人型教師があいつだったんだ

ろう。

「高井君、遠藤さん、体調でも悪くしましたか？」

スーツ姿の中年教師はラペルにグリーンのバッジを付けている。数学担当のアンドロイド教師ということだ。「親身になっています」そんな心配そうな顔を俺たちに向けてくる。

センサーから送られてきた情報で俺たちの健康状態に問題がないことを知ってるくせに。

こちらとせいぜい腹が減ってるくらいだよ。

「どうするの？」

たずねる遠藤に対して俺の答えはいたってシンプルだった。

「まかり通る。出せる最高速度で可能な限り左端を走れ。あとは俺が隙を作る。もたもたしてる間に増援教師たちに挟まれたら終わりだからな。ここは時間勝負だ。行くぞ」

遠藤の首肯を見届けてから、もう一度正面の人型教師に意識を戻す。

まるで動物を餌付しているかのような柔和な表情で歩き寄る人型数学教師に俺たちは挑む。

障害物のない直線の渡り廊下は走りやすく、二人はグイグイと加速していく。

遠藤のやつ、ちっちゃい割に意外と走れるな。身体に見合わない大きなストライドが気持ち良いね。

俺は渡り廊下の右端を、速度を合わせて遠藤より一歩分だけ早く走る。

「何かあるのなら私が話を聞きますよ」

面識もないのにやたらと笑顔で相談役を買って出る人型数学教師との差はしかし詰まっていくな。

「……仕方ないですね」

前進を続ける俺たちを前に、相手もついに身体を低くして身構えた。

説明したところで最初から折れるつもりなんかないだろうがお前

らはっ！

当然、向こうはまず先に来た俺を捕えようと、こっちへ一歩分寄って手を伸ばしてくる。

「甘いっ！」

俺は予備動作なしに前方へ飛び込み、前回り受け身の要領で回転。その動きに対応しようとさらに腰を落として俺の方へと身体を向けるがもう遅い。掛かる慣性を利用して起き上がるとすぐに走り出しつつ左後方を確認。

予想通り人型教師は俺の動きに合わせてよとしたせいで遠藤への対応が遅れ、手を伸ばすもその小さな体は左側の壁ギリギリをすり抜ける。

俺たちはそのまま人型数学教師を置き去りにして中央廊下を駆け抜け、最短距離兼安全圏を行こうと突当たりを右折

「左折しろっ！」

急旋回して左へ進路変更。急な要請に足踏みする遠藤を押し出してどうにか前進する。

やべえっ！ 首元を何かがかすって行きやがった！

俺を捕まえようと伸ばした人型教師の手かつ？

思わず冷や汗が吹き出してくる。

右折先にもう二人も人型教師が隠れていたなんて。予想以上に早い対応だ！

すでに高井、遠藤組は脱走犯のような扱いになっているのかもしれない。

「高井君こっちは無理よ！」

そう言って速度を緩める遠藤。

見れば左側にも二体の人型教師が詰めてきていた。これで丁字路全てを塞がれしまったことになる。

「二人ともどうしたのですか」「授業中ですよ？ 体調不良ですか？」

そんな言葉を掛けながらも人型教師達はじわり、じわりとその距

離を、まるで動物園から逃げ出した獣を追いつめるかのように縮めてくる。

「どうするのよ？」

意外に冷静な遠藤は、俺を試すかのような聞き方をしてきた。

「考えてる最中だよ」

まだ屋上までは距離がある。接触を伴う突破方法は出来ればまだ控えたい。そんなことになればすぐにでもあいつが出てくるだろう。でもこのまま遠藤がつかまってしまえばそこでこの逃走劇は早くも終わりを迎えてしまう。

こうしている間にも包囲網はその範囲を狭めていく。俺らはいよいよ肩を寄せ合うほどまで追いつめられてしまった。

「やっぱりこれしかないな。ちよつと怖いかもしれないけど我慢しろよ？」

遠藤の返事を聞かずに強化ガラス製の窓を全開にして飛び上がり、棧に足を掛ける。

「……いくら二階でも無茶苦茶だわ」

そして棧の上に立った俺は、非難を上げる遠藤に手を伸ばす。

「いいからつかまれ。チケット分の働きくらいはするから」

半信半疑のまま、それでもここぞつかまるよりはマシだと考えたのか遠藤は俺の手を取った。

「やめなさい」「そんなところに乗るなんて危険ですよ」

駆け寄ってくる人型教師達の声を無視して遠藤を引き上げ、そのまま俺は片手で抱く形を取りながら窓の外へと飛び出した。

「うそでしょ！ キヤアアア！」

わずかばかりの落下時間。俺は着地のための姿勢を取る。

「よつと。ほらもう良いぞ」
目頭にしわが寄るほど強く目を閉じた遠藤に声を掛けると、恐る恐るまぶたを開いた。

「ここって……勝手口の上？」

「そついうことだな。教師どもは慌てて階段に向かったよ」

俺らが着地したのは窓から約一メートル五十センチ下の雨避けの上だった。こちら側は校舎の後方側に当たり、一面校舎の陰になっている。

「……脅かさないで。……って、い、いつまでそうしてるのよっ」
俺の腕からすり抜けた遠藤は、眼鏡の位置を直してそっぽを向いた。

へえ、遠藤が機嫌損ねるのなんて始めて見たな。意外と可愛いところがあるもんだ。

「にしても想像以上だなこの管理体制は。教師陣の最大数が授業で出払ってる時間を狙ったのに、すぐにあれだけの包囲をしてくるなんて」

「驚いたわ。エスケープってこんなに難しいのね。でもどうするの？　ここからその窓には戻れそうもないけど」

「かと言つて下には降りない方が良くい。東校舎の一階は職員室だし、今の五体もこの下に降りてくるだろうから」

とは言え、ここで籠城するわけにもいかない。俺は前もって準備しておいた経路の確認をする。

「まあ、ここまでは十分あり得るかなと、一応計算はしてあったよ」
一階の昇降口が職員室の目の前ゆえ、今さっき通過した中央廊下は校舎の構造上、屋上に行くには『不可避』なポイントだった。

そのため、駆け抜けた先を塞がれた場合のことは考えてはあった。弱冠の危険を伴うから出来れば使いたくなかったけど。この高校の管理システムはやはりあなどれない。

「そうなの。それでここからどうするの？」

数メートルに渡って作られた雨避けの端、そこから飛び付ける位置にある一つの窓が開いている。俺はそこを指さして見せた。

「……あそこって……ちよっと何考えてるのよ。私はイヤ！」

「さて、ここからどうしようか」

「まず一秒も早くここから出たいんだけど」

「でも誰も俺らを探しに来ないだろ？ やっぱりでここで一度落ちつく必要がある」

「落ちつけるわけないでしょ！ こんなところ誰かに見られでもしたら」

「声がでかいよ。とにかく一度落ちつけて。ほら深呼吸でもして」

「……高井君。それ本気で言ってるの？」

「……さすがに深呼吸はアレか」

人型教師に見つかる前に雨避け上から移動することに成功した俺たちは、一時的に身を隠すことに成功した。

ただ、こんな絶好の隠れ場所だったが、遠藤には気に入らなかったらしい。

まあ無理もない。何せここは男子トイレだし。さっきからずっと顔が赤いままなのもそのせいだろう。

「それにしても、どうしてここなら見つからないの？」

「トイレの出入りやら、中の状況をセンサーとかカメラで追うわけにはいかないだろ。だからここは死角なんだよ」

「……高井君って妙なことに詳しいのね。教室のドアを開けるのもそうだったけど、そういうことに手慣れている感じがするわ」

自動制御ドアは血流を輪ゴムで抑え、体調不良を装ってドアを開けるという方法。

トイレにセンサー等が付けられないというのはプライバシーの観点から。

全て懐かしい記憶だった。

「昔取った杵柄ってやつだよ。中学二年の頃なんかは今よりもさらに酷かったからな」

「中学生時代はもっと不良だったわけね。でも、部活をしてなかったにしては走る時のフォームがずいぶん綺麗なのね。脚の回転も軽くてしなやかだし」

その分厚い眼鏡はそんなに色々な物を見通すことが出来るのか。

それとただ単に遠藤の観察眼が鋭いのか、どっちだろう。

そんなこと小学校の時以来言われたことなかったんだけどな。

「まあ何だ。昔短距離をちよつとな」

「やめてしまったの？」

「小学校の時いなかったか？ 走るのが早い。それだけが取り柄のやつ」

「いたわ。彼らはクラスのヒーローだったわね」

「俺がまさにそれだったんだよ。誰かに褒められたのはその時が初めてだった。まだうちの小学校は先端科学の導入前で、口が悪いけど子供好きな優しい先生がいてさ」

「アンドロイドではない先生だったのね。めずらしい。私は授業を受けたことないわ」

「それで、かけっこの早さだけが自慢だった俺は中学に入って陸上部に入っただけだな。今の体育の授業とかもそうだけど、各人の限界能力値がデータ化されてるだろ」

「そうね。神経系、筋力、体力などのデータからその人間の運動値を割り出して、各人の限界値に向けて努力するって言うのが、無理のない体育の授業と言う形になっているわ」

それは確かに、センスがある事を早めに見つけ、ないものを見切るための助けになるのかもしれない。でも。

「十一秒フラット」

「え？」

「俺が成長して最終的に出すことのできる予想最高値。百メートルを十一秒ちょうど。それを超えることはできないって」

やらずして自分の限界を知らされた翌日、俺は入部したばかりの陸上部を退部した。

健全な発育を促す云々で部活への加入自体は推奨されている。でも俺にとっては何かが許せなかった。

「見えない限界に挑んで結果十一秒だったらまだ、違う気持ちでいられたんだと思うけどな」

「……」

「初めて触れた先端科学教育がそれで、加えて反抗期だったからなでも結局体育教師型に力負けて、今度はアンドロイド教師の存在を否定してやるうつて自力での勉強に必死になってここに入學つて感じだな。知ってるか？ あの体育教師型、調べたら百メートル十秒八で走るんだって。馬鹿にしてるよな」

……何語ってんだ俺。トイレで。

自分語りなんて習慣、持った覚えはないんだけどな。

それは誰にも言ったことのなかった、俺の無駄な戦いの理由だ。

そうやって一息ついたところで気がついた。あの淡々と職務をこなす会長様である遠藤の表情が妙に感傷的なものになっていたことに。

「……ごめんなさい」

そう言つて遠藤は頭を下げた。

………どういふことだよこれは。

俺は思いがけない事態に慌ててしまった。

遠藤つてこんな顔するのかよ……素直に謝つたりなんてし得ない高慢会長だろお前は？

「ま、ま、まあ中学時代に人型教師相手に立ちまわった経験があるからな。そういう意味ではこのエスケープの相棒に適役だぞ俺は。遠藤の選択は間違つてない。ただ、中学の時一回もあいつらを出し抜いてみせたことはないけどな」

俺の見てきた、小耳に挟んできた設定との余りの違いに調子が狂う。だから俺はできるだけ砕けた言い方をしてごまかした。

どうして遠藤に氣を使われて、俺が氣を使い返すのか。真逆な立場で生きてきた俺たちにはなんとも妙な話だった。

「どうして私の頼みを聞いてくれたの？」

「うーん。期待してたのかもしれない。遠藤みたいなのがこんな話持ちかけて来て。あの時出来なかった事のリベンジが果たせれば、何かあるかもって。そんな漠然とした予感みたいなものに………どう

してか」

きつとそうだった。

そうでもなければこんなことをペラペラ語るようなやつじゃなかったはずだ。俺は。

「……とにかく、俺たちは雨避けで見られたのを最後に消えた形になっっているはずだ。それ以後センサーに引っ掛かっていないことから考えて、一階の校舎外にいるって計算されてるだろう」

しみみりした雰囲気を払拭するため、俺は努めて前向きに現状を伝える。

「校舎内は手薄になっているっていうこと？」

「そう願いたいね。ただ、ここからは運と判断だな。東校舎の三階四階は作りがプレーンだから奇策は持ち得ない」

「ねえ高井君。ここを出たらどうするつもり？」

「どうするって、左側の階段を一気に上がるつもりだけど」

「右側の階段の方が良いと思うわ」

「なんでだよ。屋上へ続く階段は出て左側の階段。右側の階段の一階に職員室。わざわざ遠回りをして職員室に近づく理由はないだろう」

「生徒会の仕事をしていて気付いたのだけど、先生はとても合理的なのよ」

「どういうことだ？」

遠藤の話は少し飛躍している。

「何となく。みたいな行動がない気がするの」

確かに……言われてみればあいつらには『無駄』が一切ない気がする。

やはり基本的にはデータで動いているからだろうか。

「そう考えると、職員室を出て右側階段を上がりながら各階を端から見渡して、四階で状況を送信するのが各階の状況を伝えるには初速が早いでしょ。そこから四階を歩いて左側の階段を下りていく流れで移動すると考えられない？」

「そういうことか。俺たちが左周りだと最悪鉢合わせの可能性がある。対して人型教師たちと同じ流れで進めば、場合によっては見つからない。さすがにそこまでは期待しすぎかもしれないけど」

眼鏡のふちに触れながら遠藤は一度うなずいた。

「でもどこかでセンサーに見つかってしまったら、その時点で居場所とは知られてしまうけど」

「……この短時間でそんなことまで思い至るのか。さすがに頭の回転が速いな。」

「階段のセンサーは廊下から階段の踊り場への出入りで作動する。基本的に各『節』に設置されてるからな。センサーにかからず階段を上下する方法があるから、それで四階まで上がろう」

教室を抜け出て二階へ向かう際は、中央廊下を渡る際のセンサーを回避することが不可能だから使わなかった。これは俺の最後の隠し玉だ。

「行けそうな気がしてきたな」

遠藤は無言で一度うなづいた。

「よし、エスケープを続けよう」

俺はもう一度気合を入れ直し、トイレの出入り口から左右の様子をうかがう。誰もいない。まして東校舎は技能科目の専用教室と倉庫代わりの空き教室ばかりだからそちらに気を使う必要もない。

よし行こう。遠藤に合図するため俺は振り返って……。

「なあ」

遠藤は「なによ」と俺の方に顔を向ける。

「別に何もしてないんだから手を洗う必要はないか？」

微妙に緊張感を壊す遠藤の行動に突っ込みを入れる。

「……教、室を出る時に転んで手を付いたから洗っただけよ」

むしろ感心するべき習性だと思うが、指摘されたのが恥ずかしかったのか、遠藤はそんな風にごまかした。

授業中の廊下は奇妙な静けさをたたえていた。

トイレから抜け出した俺たちは、計画通り右側の階段を目指して静かに歩を進め、無事に階段前にたどり着くことに成功した。

「それで、どうやってセンサーにかからずここを抜けるの？」

「その非常用ドアを通るだけだよ」

階段の踊り場の端には、廊下との垣根のようなメートル程度の壁が出っ張っていて、そこに鋼鉄製の重たいドアが備え付けられている。

火災の時、各フロアから階段を通じて火や煙などが広がらないようにするため、階段と廊下の間には防火シャッターが設置されている。緊急時に遠隔からでも開閉ができるよう、機械制御が行われているので、センサーなどのシステムも同時にそこに付設されている。しかし、そのシャッターが閉められた後の出入りのために作られている防火扉は、いつでも手動で開閉できなければならない。そして普段人の通らないドアにわざわざ高価なセンサーを取り付ける必要はない。

体重を掛けて重たい防火扉を押し開け、遠藤を先に行かせてから音を鳴らさないようにそっと閉める。

「灯台下暗しって感じね。でもこれなら四階までどころか屋上まで足跡を残さずに上げれるわ」

その通りだ。もちろん途中で先行く人型教師を見つけたり、後方から見つけられてしまった場合はそうも行かないが。

この静けさが俺たちを探している教師陣が外に出払っているからなのであれば、まさに今が千載一遇のチャンスと言える。

「行こう」

俺たちはこの偶然から生まれた幸運に浮かれながら階段を早足で登る。

そして硬直した。

二階から三階へ上がり、さらに四階へ上がろうと階段の半分を登

り切ったところでその事態は起きた。

俺たちの十段ほど前方を上る人型教師の背を目前にしたからだ。紺色のジャケットを着た人型英語教師は、自分たちの担当教師でもある。

動いたらダメだ。音を立てたら振り向かれてしまう。

その場で足を止め、彫像のように動きを止める……このまま乗り切るんだ。

くいくい。

それだつて言うのに遠藤は俺のシャツの裾を引っぱってきた。

くいくい。

今は動くな。気付かれたらどうするんだ。

ぐい。

ああもうなんだよっ！

仕方なく振り返ると、遠藤は目を見開きながら階下を指差していた。

……まさか。

遠藤は階段を静かに、それでいてにわかな焦りを感じさせる速度で上がり始める。

挟まれてるのか。

こうなると後方の人型教師の視界に入ることなく、かつ前の英語型に気取られないようにしなければならぬ。

何という不運だ。

やむなく俺は、足音が鳴らないよう最大限注意しながら階段を上ることにする。

そして程なくして四階の踊り場までたどり着く。

問題はここだ。このまま前進してしまつては四階廊下へ出る際にセンサーに引っかけられる。そうなつたらその時点で前後を人型教師に挟まれたまま居場所を知られることになる。

先行く英語型が四階の廊下を進み始めたのを確認してから俺は先行し、そつと防火扉に触れる。

こいつが鳴ったらお終いだ。

祈りを捧げつつ、不発弾の処理作業のように俺はゆっくりと防火扉を引き開ける。

……セーフ。安堵と共に遠藤を促し、先にドアを通らせてから俺も続く。そして開けた時同様に細心の注意を払いながら防火扉を閉めた。

廊下側に出てすぐに防火扉用のへこみに忍者のように背を張り付け、遠藤にも促す。

ここでこうして時間を稼いで後から来る人型教師をやり過ごし、前後を挟まれた状況から抜け出そうということだ。

その意図を察した遠藤も俺に続いて防火扉に張り付いた。

なぜか、バンザイの姿勢で。

指先まで気を抜くことなく、綺麗に防火扉と平行に伸ばされた両手。体操の決めポーズのようなあまりに綺麗な直線が描かれていた。しかも足元までしつかりつま先立ちじゃねえか……。

しかしその表情はあくまで真剣。見を隠すため一ミリでも防火扉に近寄ろうということなんだろう。

さすがと言うかなんと言うか。さすがにそこまでの必要はないんだけど、それでも下手に声を掛けるわけにはいかない。俺は近づいてくる足音に意識を集中する。

それは一分にも満たない時間のはずなのに、体感は十倍にも二十倍にも感じられた。

ゆっくりと、しかし確実に足音は遠ざかっていく。

……よし、そろそろ頃合いだろう。

これで挟撃される事はなくなった。

しかしまだ終わらない。この場所は廊下を進む上で背後に位置付けるから見つからないだけであって、廊下最奥に着いた紺ジャケツトがもう一度この階を見渡す為に振り返ったら発見されてしまう。

もう一度防火扉を開いて階段側へ戻り、完全に二体がこの階からいなくなってから廊下を進む必要がある。

ここの判断さえ間違わなければ、後は屋上まで駆け抜けるだけだ。遠藤を制し、廊下を確認。紺ジャケットが左側階段に着こうとしている。

階段側に戻るなら今だ。

それは、挟まれていた状況を回避したことで生まれた慢心か、それともただの不運か。

押し開けた防火扉が金属質な擦過音を鳴らした。

俺と遠藤の周囲の空気が凍りついた。

なぜか俺は何か音が鳴るわけでもないのに、ギリギリと首を人型教師のいる方へ向ける。またしても祈るような気持ちで。

そして振り返った後続の人型教師と目が合った。

「おや、高井君と遠藤さん。どうしました？ 今は授業中ですよ？」
後続の人型教師は足早にこっちに寄ってくる。

……なにが「どうしました？」だ。俺たちを探していたくせに白々しい！

その苛立ちがしかし凍っていた時を再動させてくれた。

「くだれっ！」

同じく硬直したままだった遠藤の肩を叩き、俺は登って来たばかりの階段を駆け降りる。

そしてそのまま三階の廊下へと駆け込んだ。見れば遠藤も遅れて俺の後に続いている。

階段の方からは当然、俺たちを追う人型教師の足音と「待ちなさい」と言う声が聞こえてくる。

「先生の手が髪に当たったわよ！ 危うく捕まるところだったじゃない」

走りながらも明らかな不満顔をしてみせる遠藤。

これは俺の失態だ。少し間隔が厳しかったとはいえ、少なくとも遠藤の推測は間違っていなかった。左側階段から進んでいたら鉢合わせの形が二度用意されていたわけだし、あの場を乗り切ればそのまま屋上へ行けていた可能性もあった。

「一度無音で開いたドアが次に開ける時に鳴るなんて思わないだろ。こうなったらあと二階分、左階段で一気に駆け上が……」

それは不幸な偶然か。それとも恐るべき対応の早さか。

左側階段から歩み寄る二体の人型教師の姿。それも……ここまで一度も見かけていないやつらだ。何体出回ってるんだよ今っ。

何だかんだで追いつめられちまったじゃねえか。

三階からではさすがに窓の外へ飛び出すわけにはいかない。この世からエスケープしてもおかしくない高さだ。

判断を間違えた。立て直しを計るのであれば一気に駆け下りて距離を稼ぐなり、トイレに逃げ戻るなりするべきだった。下手に未練を残して三階に踏み込むべきじゃなかったんだ。

結局挟み撃ちを受ける形になった俺たちを人型教師三体がゆっくりと追いつめる。

動きこそ一切の隙がないくせにその顔はあくまで平穩。

理解者気取りの作り笑顔が気持ち悪いんだよ。

追いつめられた俺は手前の教室のドア、その指紋認証部に指を押しつける。

『認証エラー』

取っ手をつかんでスライドさせようと試みても、一ミリたりとも動かない。

当然、用もないのに授業中に他教室のドアを開けることなんてできない。そんなこと今では小学生だって知っている。それどころか俺たち逃走犯のコードはもう無効化されていてもおかしくない。

次のドアへ駆け付けもう一度認証を試すも結果はエラー。変わらない。

そのまま隣の教室へ。認証は当然エラー。

迫り来る人型教師に、俺たちはまたも背を寄せ合うまで追いつめられてしまった。

「ああもう！ 開けよオオオっ！」

こうなりゃこじ開けてやる。無理は承知だっ。ドアを力任せに引

つぱると、

「なっ？」

突然すっぱ抜けるような感覚を受けて転びそうになった。

あ、開いた？

逃げ込んだところで袋小路には変わらない。それでも俺は遠藤の手を取って教室内へ飛び込んだ。

すぐにドアを閉め、近くにあった机、革張りの椅子、テレビ台、掃除用具ロッカーをドアの前に並べて物理的にドアを開けづらくする。こんな物、たいした時間稼ぎにもならないだろうけど。

それでも一時の猶予に安堵の息を漏らす。

「ふう…… 本当に対応の早さが半端じゃねえなあ」

そんな俺のつぶやきに対し、

「お、先生かと思ったら生徒だなんてめずらしい」

背後から上がった声に背筋が凍りついた。

「今時エスケープだなんてイキの良いヤツがいるな」

ドアの前に障害物を置いたことがまさか自分の首を絞めることになるなんて。

諦めにも似た思いで俺は声の方に振り返る。

「ん？ ひよつとしてお前は高井か？」

思いがけない言葉がかけられる。その言葉の主には見覚えがある……。

「え？ …… 先生？」

記憶より頭が白みがかっているけど、濃いまゆ毛、短くも太くごつつい腕と脚。よく日焼けした肌。何より、頼りがいあるそのたくましい笑顔。

間違いない。小学校の頃、俺の脚を褒めてくれた人、佐田先生だ。

「佐田先生…… どうしてここに？」

「おう。アンドロイド先生の登場で、俺たちは教育関係を始め色々な部署に異動することになったんだけどなあ……」

それは聞いたことがある。アンドロイド教師たちに仕事を奪われ

た元教師たちには、主に教育関連での別仕事が国から与えられたとか何とか。

本当に……本当に鬱陶しいやつらだ。あいつらはすごく世話好きで子供好きな佐田先生を学校から追いやったんだ。

煮えたぎるような怒りが腹の底から湧き上がってくる。

「どうしても学校にいたくてな。用務員としてここに入れてもらってたんだ」

「え……？」

アンドロイドによって教育の現場から追い出されたはずの佐田先生は、あの頃と変わらない子供のような笑顔でそう言った。

「色々行き先はあったみたいけどなあ。やっぱり自分のやりたいことやるのが良い。俺は学校が好きなんだ」

「そう……ですか」

「数は少ないけどな、ここでも頼って来てくれる生徒がいてなア。

まあ呼ばれは用務員さんだけだな。あつはつはつは！」

楽しそうに、そして豪快に笑う佐田先生。

何でだろう。その言葉が胸に刺さって、痛かった。

「それでどうしてまた高井はエスケープなんかしてんだ？」

「わたしが頼んだんです。屋上に行きたいって。あ、ご挨拶が遅れました。高井君の同級生で遠藤梓と申します」

遠藤が会長様モードで丁寧な名乗りを上げる。

「頼まれて屋上へのエスケープの手引き。ほお……それだけか？」

「……いえ、リベンジです。自分にとっては。あいつらの包囲網を抜け出してやるのが」

「リベンジってことは何度が失敗してんのか。中学の時か？ まあ無駄なことに熱くなれるのが若者の特権ってやつだなア」

笑いながらそう言う佐田先生を見て、俺は言葉に詰まった。

確かに……これは無駄なことなんだろう。遠藤を屋上に連れて行くことに成功したところで得ることが出来るのは罰と内申書の傷だけだ。

そして俺はその無駄のたどり着く先を知っている。

最初は先端科学教育を否定したくて悪さを企み、管理システムと人型体育教師に敗れた。

それからはアンドロイド教師を否定するために必死で勉強して、この学校へ入ってやった。

でも、得られたものは何もなかった。手にしたものは虚無感と三年間の怠惰な生活だけだった。それは確かに無駄な事だ。

だけど……。

「だけど、あるもんなんだよなア」

まるで俺の心を見透かしたかのように佐田先生は続けた。

「上手くいかないこと、気に入らないこと、ごちゃ混ぜになった感情を、無駄だ、間違ってるって思っても止められない時が」

言葉が出なかった。

「それに、その無駄で気付けること、答えにたどり着くこともある」
そう佐田先生が続けたところで自動制御ドアを叩く音がした。俺たち二人は思わず見合った。

「高井君、遠藤さん。出てきてください！」

人型教師たちの声が聞こえ始め、ドアの前に集めた調度品たちが揺れ動く。ここに入り込まれるのももう時間の問題だろう。

「……先生はここで何をされていたんですか？」

「ここは使わなくなった教材とかを置いてある倉庫なんだよ。ここ
の整理という名目で居座ってるんだ。頼りに来てくれる生徒のために、
実は手動でもドアを開けられるようにしてあるんだ。荷物を出す
度に認証するのは大変だっていう建前だな。だから認証なしに入
れたんだぞ」

そう言われて見回してみると、確かにこの教室には掃除ロッカー
や本棚、ソファなどを始め、地球儀、文化祭や体育祭で使われそう
な看板までとにかく色々な物が押し込まれている。ぱっと目で全体
を把握できないほどだ。

「すいません先生。ちよつと騒がしくなるかもしれません。遠藤、

こうなつたら力技で押し通ろう。やれるところまでやるんだ」

遠藤は神妙な面持ちで一度うなづいてみせた。

「……高井はア、まだ先生と呼んでくれるんだな」

「当然です。先生は先生ですから」

「そうか。それなら先生として一つ言わせてくれ。高井、こういうことをするとは言わない。でも高井が一番したいことは何なんだ？」

「……わかりません。ただ、何かが見つかるかもしれないって、止められませんでした」

「終わつたらちゃんと、ごめんなさいできるか？」

「……はい。いけないことをして迷惑を掛けてます。終わつたら土下座します」

佐田先生の強く優しい目を、俺はあの頃に負けなくらい真つ直ぐに見つめ返した。

「二人でそれに入れ」

そう言つて佐田先生が指差したのは、家電製品が詰め込まれていたのであろつ縦横高さが各メートルちよつとくらいのダンボール。続けて黒板の下から台車を持ち出し、上にダンボールを乗せたところで俺たちもその意図を察した。

「ええと佐田先生。これと、これと、これ頂いて行きます」

「はつはつは。怪我だけはするなよ」

「気を付けます」

適当に身繕つた物品をダンボールに詰め込み、俺も中に踏み込む。少し狭いけど出来るだけ身体を縮めれば中に収まることができそう
だ。

「どうした？ 遠藤早くしろ」

「……脚が届かない」

「なに？」

「脚が届かないの！」

……高さ一メートルか。確かに遠藤には難しいかもしれない。い

や無理だ。

「仕方ねえな」

高跳びで飛び込んで来い。とも言えず、俺はダンボールの前で立ち尽くす遠藤の両脇に手を入れて抱きかかえる。

「……屈辱だわ」

人形のように箱に納められた遠藤は両拳を震わせながら無念そうな顔でつぶやいた。

「行くぞ」

佐田先生の号令を受け、上蓋を閉めて息を殺す。すると台車がゆっくりと動き出し、ドアの開く音がした。

「あれ、先生方。どうしました？」

佐田先生の声だ。

「ここに高井君と遠藤さんが逃げ込みました。見ませんでしたか？」

「うーん、申しわけない。備品の数を数えるのに夢中で気が付かなかったですなア」

重いものを引きずる音が聞こえる。おそらくまだドアの前の調度品を退かしているんだろう。

「ここには掃除用のロッカーを始め、隠れ場所が豊富ですからね。わたしはもう用が済んだので、ご自由にどうぞ」

そうしてまた台車が動き始める。

ずいぶんとありがちな作戦だけど、佐田先生らしいと言っかなんと言っか。絶妙な演技力で堂々と倉庫教室を抜け出した。

「……佐田さん」

「はい？」

人型教師に呼び止められ、台車の動きが再び止まる。

「その箱は？」

息をのんだ。ここで中身を暴かれたらもうお終いだ。

「ああこれはもう使わない放棄やモップなんかをゴミに出そうと」

「そうですか。でしたらそれが終わったら職員室前の電球が切れていますので交換お願いします」

「わかりました。それでは」

ようやく動き出す台車。俺は出来るだけ静かに息を漏らした。

「……高井君」

「ん？」

遠藤が身じろぎしたんだろうか。かすかに鼻先を石鹼の匂いがくすくつた。

「絶対に屋上まで行きましょう」

小さな暗闇の中にもつれるように詰め込まれた俺たち。遠藤は小さな、それでいて力強い声でそう言った。

今日の遠藤は本当に別人のように態度を変える。それに少し戸惑いながらも、

「ああ」

負けないくらい小さく、俺も力強く応えた。

「すごいな。この階だけで計五人の先生が見回ってたぞ。左側の階段はちょっと無理だったなア」

なぜだか楽しそうにあごをさする佐田先生。

三階の右階段前踊り場まで連れていつてもらった俺たちは、ダンボールから出て備品を取り出していた。

「これは？」

それは腰に差しとけ。スカートだと、うまく挟めば……ほら刀みたいだろ。まあ一応な。

「さて、それじゃあここからはお前さんたちで頑張りな」

俺たちが準備をしている間に佐田先生はさつさとダンボールをたたんでしまっていたようで、台車と一緒に脇に抱えると、あの子供のような笑顔を残して階段を降りて行く。

俺が成長したからなのか、過ぎ去った歳月のせいなのか、佐田先生は少しだけ年を取ったように見える。それなのに俺は、小学生の時には気が付かなかった、背丈ではない大きさをその背中に感じていた。

「俺はさっきの倉庫が用務員室にいるから、いつでも尋ねてきな。遠藤さんもな」

こちらに振り向くことのないまま、片手だけを振りながら佐田先生は階段を下りて行った。

「……素敵な先生ね」

「だろ？」

佐田先生の教え子であること。俺にはそれがとても誇らしかった。

東校舎の静寂はその中に、にわかなざわめきを孕んでいるように感じる。

泣いても笑っても、ここが正念場だ。

俺は遠藤に最後の確認をする。

「絶対に立ち止まっちゃダメだ」

「わかった」

「俺が前に出る。だから俺が捕まっても遠藤は振り返らずにそのまま駆け抜ける。場合によっては俺の背を踏み越えてでもだ」

「……ええ」

「逃げ際に三階センサーにかかってしまったこと、アンドロイド教師に見つかったことでかなりの人型がこの三階付近にいるはず。もうまどろっこしいことはせずに四階階段のセンサーは堂々と通り抜ける。ここも増援が来るだろうから早さ……プラス強引さ勝負だ」
「もうあと階段二つに廊下一つまできたのに、何だかすごくいばらの道のような気がするわね」

「ここまで来たらもう行くしかねえよ」

二人、自然と目を合わせ、そして同時にうなずき合った。

「見つけました！ 高井、遠藤は三階階段にいます」

静けさを切り裂く声があがる。それは造詣の若い人型教師のものだった。二階から三階へ上がってきたところなんだろう、報告と同

時にそのまま駆け上がった。

「行くぞっ！」

俺たちは駆け出した。

屋上への最後の廊下を突破するため、もう立ち止まるわけにはいかない。

三階から四階へ。ついに最後の関門だ。

センサーを無視して四階廊下へと躍り出る。正面数十メートル先に一、二、三体。人型教師は俺たちの姿を確認すると同時に二体がこちらへと向かってくる。もう言葉もない。

とにかく俺たちを捕えることだけを目的としている。そんな雰囲気だ。

「最初はぐぐり抜ける感じで」

と俺のほぼ真後ろに続く遠藤に指示を出し、インパクトの瞬間に備える。

まずは二体、程良い間合いに入ってきた。

……くらえっ！

俺は倉庫化した教室から持ち出した黒板消し四つを取り出し、迫り来る人型教師たちの頭上目がけて投擲する。

黒板が液晶化されてからというもの、その姿を一気に消した懐かしい代物だ。

人型教師の直上の天井に直撃した黒板消しは、含んだ大量のチョークの粉を一気に吐き出した。

人間らしさと言う点でも出来の良いアンドロイド教師はそれを避けようと半目になりつつ左右に一歩下がった。

この、精緻なまでの人間らしさはここでは攻略のカギになるっ。

体勢を崩し、目を細め、顔を背けた人型教師陣の隙間を俺は駆け抜け、遠藤の方を確認する。

遠藤はもとの低い身長を、腰を折ることでさらに縮めて後に続く。

これであと一体、行けるっ！

しかし三階左側の階段付近にいたのであろう人型教師たちがすぐに増援に駆けつけてきた。

その数、四体。

初戦で黒板消しを使い果たした俺は、制服のズボン、その背中側に差した最後の武器を取り出す。

右手に二等辺三角形、左手に直角三角形。今は人型教師が自力で黒板に正確な図形を描いてしまったために使われなくなった巨大な定規を両手に俺は間合いを測る。

「退いてろーっ！」

そして大きく開いた両手をクロスするフォームで、二枚の定規を同時に放つ。

高速で地を滑り、迫る二枚の三角定規に四体の人型教師は思わず飛び退り道を開けた。

その隙に開かれた道を駆け抜ける。

「きゃっ」

短い悲鳴があがった。さすがに四体ともなると立ち直りの早い者がいる。後方二体の手が遠藤へ伸びるのが見えた。一方を避けるために大きく身を傾げた遠藤の腕がもう片方の人型につかまれる。

その結果、腕を引っ張られる形になった遠藤は、慣性で上半身を後方へ大きく仰け反らせた。

「ちっ」

さすがに四体をくぐり抜けるには弱い。

……ここを抜ければ残りは一体。最悪でも俺があいつを引き止めれば遠藤のエスケープは成功する。

ここまで来れば、もう逃げ切れるっ。行くぞっ！

俺は、遠藤の腕をつかんだ人型教師の手を手刀で払い、再び詰め寄ろうとする三体の先頭を目がけてタックルをかました。

遠藤を囲んでいた人型教師たちは一気に体勢を崩し、ドドッと折り重なるように尻もちをついた。

そして即座に警笛が鳴り響き始める。

……ああ、本当に懐かしいな。

生徒が人型教師に暴力行為と判断される接触を行った場合に発令される警戒音。

これで俺たちは全管理システム、人型教師にとって『捕まえるべき問題児』から、『取り押えるべき不良』と認識されたことになる。こうなるともう向こうは俺たちを取り押えるために向かってくることになる。一気に数段難易度が上がるということだ。でもここからなら、ここからならやつが来る前にたどり着けるはずだつ。

「遠藤、続けっ！」

初めて耳にするのだろう耳障りな警笛に、あっけに取られている遠藤を促す。

「え、ええ」

そして俺たちは残っていた最後の人型教師の攻略にかかる。

白髪交じりの妙に綺麗な七三分け、そしてブレザーの胸元には目立つ銀色のバッジ。こいつ……教頭じゃないか。

相手は他の人型と違い、各生徒の情報をより豊富に有し、他の人型教師へ送信することもできる。教師陣のサーバーのような存在だ。しかし、だからと言って他の人型教師と身体能力に大した差があるわけじゃない。

よって布陣は最初に人型教師と相対した時と同じ、廊下の左右両端に分かれ、一分だけ俺が先導する形だ。物理的に廊下の左右を走る生徒を同時に捕まえることは不可能だ。

そして仮にどちらかだけにしぼって捕まえに来るのなら、目前で暴力行為を行った張本人であるところの俺をスルーさせるはずがない！

俺がわずかに先にいる以上、必ずあいつは俺の方に来ざるを得ない。トップスピードに乗れていないことが少し気にかかるけど、それでも十分突破可能はずだ！

四階に配備された最後の人型である教頭はもう俺だけに照準を合わせている。その体制を俺へと向け、しっかりと腰を落として足を

開いた。

やっぱり。まずは確実に一人って言う腹か。
望むところだ。なにより俺はまず遠藤を先に行かせなければなら
ない。

猛進していた俺は教頭の三步ほど前でその足をピタリと止めた。
そのフェイントに一瞬反応し、教頭はぴくりと身体を震わせる。
その隙に遠藤が左隅を抜けて行く。

これで遠藤は屋上へ向かう最後の階段にたどり着ける。俺がこ
こで捕まったとしてもその依頼を遂行させたことになる。

もちろん、俺も自分のために出来る限りのことはするけどなつ。
相手に肩を向け、タックルの姿勢を取りながら俺は一步目を踏み
出し、二歩で身体を落とす。

教頭も同様にグツと身体を沈めて俺の体当りに備えた。

ここだつ。

しかし俺は最後の一步で正面に向き直し、右脚を出来る限り後方
へとスイングバック。

そしてそのまま上履きを蹴り飛ばす。

「……！」

まさかの一撃に驚愕する教頭の表情が見えた。

右足から放たれた上履きは見事教頭の顔面にヒット。相手の姿勢
が崩れたところで、俺は振り抜いた足をそのまま軸足にしてジャン
プ。体勢を低くしたままの教頭の肩を踏み台にしてその後方へと着
地する。

そして振り返ることなく階段へと向かう。

……成功だ。

思わず身震いした。行ける、行けるぞ屋上にっ！

高ぶる鼓動を感じながら、踊り場へ入ろうと右折したところで何
かにぶつかった。

予想外の障害物に思わずよろける。

あれ……これって。

小さな頭、華奢な身体。それは先に階段を上り始めているはずの遠藤だった。

「遠藤……？ どうしたっ？」

立ち止まったままの遠藤の視線は一点を見据えたまま固定されている。

そしてようやく俺も気が付いた。その先にいるのは、屋上への最後の階段前に仁王立ちしているのは……。

「体育型……」

その作り上げられた圧倒的な体軀を前に、心臓を内側から揺さぶられるような感覚を覚えて足元がふらついた。

この学校では沢田と呼ばれる人型体育教師。他の人型教師と比べ一回り、いや二周り高い長身に、それを覆う分厚い筋肉が猛々しい。そして球技、水泳、柔道、体操に陸上とあらゆる競技を網羅し、はみ出し者の首輪をつかむ先端科学教育界の番人。

……五年前の俺がついぞ打ち負かすことのできなかった存在だ。警笛が鳴るとこいつが動き出す。だからギリギリまで直接攻撃は控えていた。

情けない話だが、俺はこいつを出来る限り出張らせたくなかった。……エスケープを、この無駄を成功させるにはこいつを越えることが絶対条件なのか？

気が引けてしまったのだろう。いつの間にか俺は一步下がってしまった。あるうことが、目の前の状況に気を取られて背後の状態を忘れていた。

「高井隼人。そこまでです」

そう言っただけで俺を羽交い絞めになると、一度はかわした人型教師も次々に俺の腕を、胴をつかんできて、あっという間に身動きが取れなくなってしまった。しかも『取り押えるべき不良』と認識された俺に対しての束縛には容赦がない。

「高井君っ」

振り帰る遠藤。そしてついに、体育型はその大きな一步を俺たち

の方へと踏み出した。

「離せっ！ 離せーっ！」

人型教師たちを振り払おうと力任せに動き回るも、これだけの数で抑え込まれては口々に身動き一つ取れない。

俺はそれでも動き回り、全身を固定されたまま目だけで逃げ場を、このエスケープを終わらせないための活路を探す。

何か、何かないかつ。

しかし階段には人型体育教師、廊下には一度かわした人型と教頭の計七体が詰めかけ、そして唯一の逃げ道だった下り階段にもどめとばかりに登ってくる二体の人型教師。

屋上を目前にして全ての進路が、退路が絶たれた。

遠藤に進むことのできる道はなく、俺は身体を動かすことすらままならない。

俺の想いとは裏腹に、無言のまま終わりへとにじり寄って行く体育型。

これだけの数の大人に敵意を持って囲まれたことなんて始めてなんだろう。遠藤は追いつめられた小動物のようにその場から動けずにいた。

もっとも、動けたところで逃げ場なんてないのだけれど。

……結局、この逃走劇も無駄に終わるのか？

ゲームオーバーを目前に、突然脳裏にそんな思いが浮かび上がった。

この怠惰な三年間に意味なんかはなく、遠藤の突飛な頼みことも、佐田先生との再開も、結局何一つ見つけられず、答えに結びつくことなく終わってしまうのか？

何かが、何かが引つ掛かったままなんだ。もう少しで気付くことが出来そうなのに、このままじゃ、それに届かないんだ。

そして体育型の大きな手が、遠藤に伸びる。

それはまるで、希望が潰えてしまうような、そんな恐怖にも似た感情だった。

終わってしまう……終わってしまう！

どこにも、たどり着くことのできないままっ！

「待てよ体育型アアア！」

体育型の挙動が止まる。どうしても、その何かが知りたかった俺は、恐怖を振り払おうと必死になって、

「俺と、一対一で勝負しろ！」

などと、叫んでしまっていた。

それは酷い要求だった。

自分で考えてみても、追いつめられた者が言い出せるような内容じゃない。

そんな戯言なんか無視して俺と遠藤を取り抑えてしまえばそれで終わりなのだから。

それにもかかわらず、俺の提案は承諾された。

理由は俺にも、すぐに想像がついた。

あいつらは俺の限界値を知っている。そしてそれが体育教師型に劣ると言う事も。

そしてさらに、もう警戒令は解かれているようだった。

俺を押さえこんでいた人型教師たちはその手を離している。

アンドロイド教師たちは、この学校の管理システムは、『高井は負ける』と結論付けている。

完全包囲された上で俺が突き付けたなけなしの要求、それすら打ち破ればもう何もできないだろう。諦めるだろうと。

そうしたら叱って、慰めて、高井は改心する。

そんな美しい教育的シナリオが描かれているんだろう。

ふざけてやがる。

俺は自由になった身体を伸ばして、大きく一度深呼吸をした。

「高井君」

俺の下に駆け寄って来た遠藤の表情は複雑だった。決意と、申し

わけなさが入り混じったような。

「また……余計な無駄を一つ増やしちゃったな」

そんな遠藤に俺は笑顔で返す。自嘲が入ってしまったていない自信はないけど。

六年前に出ていた結果をわざわざここで再現しようだなんて、まさに無駄の極地だ。

「高井、グラウンドへ出なさい」

有無を言わさぬ静かな迫力で体育型はそう指示してきた。

「ここで良い」

そんなことをしてたら授業時間が終わっちゃうだろ。

俺は目配せだけして、四階廊下の最奥へ向かって勝手に歩き出す。

「遠藤。スタートの合図とゴールを頼む」

「え、ええ。わかった」

廊下が階段へと変わる部分。そこにゴールとして遠藤に残ってもらい、俺は歩を進める。

こうして歩いてみると中学の校舎と比べて結構な長さがあるんだな。それでも百メートルには届かないだろうけど。

そうだな。こいつを超えずに俺の無駄は終わらない。結局、なるようになったんだ。

ようやく覚悟ができた。

廊下の端へたどり着いた俺は片方だけ残った上履きを脱ぎ、そこへ靴下を詰め込んで裸足になる。

小学校の時はどうしてか、これが一番早いのだと思い込んでいたっけ。

両手を床に着き、右足のかかとを壁面に当てる。これがスターティングブロックだ。

目を閉じて呼吸を整える。左隣に体育型が構える音がして、そして止まる。

静寂が支配した。

そっと目を開き、遠藤に向けて俺は一度うなずいて見せた。

なぜだろう。緊張はしなかった。

「よいい！」

静かに腰を持ち上げる。

その合図の仕方。小学生の頃に帰ったみたいだよ。

胸が高鳴る。

スタートダッシュ、それは俺の武器だった。

「どん！」

遠藤の声に反応した俺は最速でスタートを切る……上々だっ。

前傾した身体を少しずつ持ち上げ、姿勢を作る。

その時点でほとんど真横に体育型が並んでいた。

さすがだ。でも同時にそれは自信になった。俺のスタートはまだ

武器と呼べるレベルのままだった。

俺と体育型はほとんど差のないまま、ただ並んで廊下を疾駆する。

『高井は走るのが早いな。クラスのヒーローになれるぞ』

懐かしい言葉がよみがえる。佐田先生はそう言いながら子供みたいな笑顔でバンバンと俺の背中を叩いた。痛かった。でも、今でも確かに思い返せるほど嬉しかった。

俺のスタートダッシュはクラス対抗リレー用に佐田先生が教えてくれた秘策だ。「このスタートはもう少し成長するまで多用は禁止だ」なんて必殺技みたいでたまらなかった。

しかし、ほどなくして陸上選手もかくやという模範的なフォームで走る体育型がほんのわずかに前に出始める。

こうして同時にスタートして並んで走って、その速さに押されることなんて初めてだ。

あの頃はいつも自分の前にあるのはゴールだけだった。

今は大嫌いな体育型に並ばれ、抜き去られようとしている。

俺は自分を疑った。

そんな場合だって言うのに……楽しくて仕方ないだなんて。

『なあ、お前が一番したい事は……』

その言葉は、少し前に再開した佐田先生に問われたものだった。

ああ、そういうことだったのか。

長かったな、本当に。

俺は長距離専門じゃないのに。六年もかけて無駄をしてさあ。ずいぶん遠回りしたけど……でもようやく見つけたよ。

こんなに近くにあったんじゃないか。

俺は、今、本当に、最高に楽しいよ。たった十五秒にも満たないこの瞬間がつ。

視界に体育型の肩口が見えた。さらにもう少し先に行かれてしまっているらしい。

「っ！」

数十メートル先の遠藤は何やら顔を歪めて叫んでいる。

本当、お前って色んな顔するのな。

こんな短時間で表情をころころ変えてさ。実は結構面白いやつなんじゃねえか。

遠藤は、たまたま素行の悪い俺を道連れに選んだだけなのかもしれない。

それでも俺を誘ってくれたことを感謝してるよ。エスケープ。この無駄に。

おかげで……俺はやつとたどり着けた。

全力を尽くし、それを楽しいと思える大切なものに。

全ての無駄は、無駄じゃなかったんだ。

だからせめて、俺は俺を誘ってくれた。きつかけをくれた遠藤がもし、この無駄に何かを見出そうとしてるのなら、そのために全身全霊を尽くそう。

何かを必死になって叫ぶ遠藤の姿がドンドン大きくなってくる。

ゴールまでもう残りの距離はわずかだった。

疲労がにじみ出てきた腕を大きく振り、鈍い痛みを感じだした腿をそれでも高く振り上げる。

「うおおおっ！」

ゴールを、遠藤梓を目がけ、誰よりも、誰よりも早く駆けけるんだ。

素足がリノリウムの床をつかみ、そして蹴り上げ、さらに前へと進む。

見えない、届かないはずの壁を目掛けて俺は加速、加速、加速する。

音も、時間も、たくさんの無駄も全て置き去りにして。

俺は 走る。

そして俺と体育型は、もつれ合うようにゴールへと飛び込んだ。

俺はそのまま倒れ込んでしまった。

無様な姿で。それでもどうにか手を着いて頭だけを守りながら。肺が酸素を欲しがって激動する。

そして、あれだけの数の人型がいたこの廊下が妙に静かな事に気が付いた。

どうにかこうにか上半身を持ち上げる。……驚いた。

教師陣は総じて衝撃の表情のまま硬直している。

でも何より……。

「高井君……高井君っ！」

信じられないことに遠藤の目にはあふれ出そうになる涙。

「すごい。すごいよっ」

それはまるで奇跡でも成し遂げた者に感動しているかのような……。

…

「ひょっとして俺、勝ったのか？」

遠藤はブンブンと頭を振って俺の質問に応えてくれた。

「……そっか。遠藤。おかげで俺は見つけることができたよ……」

荒れる息をどうにか抑えて、俺はそう、伝えることが出来た。

「行こう」

遠藤は大きくうなづいた。大粒の涙が一滴こぼれ落ちて弾けた。やっと見つけることが出来た。

だからあとは長かったこの無駄を、

「ちゃんと終わらせるんだ」

迷い続けた長い時間を、無駄を、しっかり胸が張れるように。立ち上がろうとして俺はバランスを崩した。

脚が、思うように動かない。

突然限界まで酷使された影響か、ガタガタと震えてしまっただけで力が入らない。

それでもどうにか足を前に運び、一段ずつ階段を上がる。これが最後の階段だ。せめて普通に歩いているように見せながら。

「それにしても、屋上ってどうやって入るんだ？」

「ぐしゅ。屋上も災害時のために普通の鍵で開ける手動式だからこれ」

そう言っただけで遠藤はポケットから鍵を取り出して見せた。なるほど、生徒会会長だからできた技だなそれ。

踊り場を折り返し、いよいよ残りも十数段となったその時だった。

「待ちなさいっ！」

教頭が声を上げ階段を駆け上がってきた。

計算し得ない事態から思考を立ち直すことができたのは唯一教頭だけだったようだ。

「行こう！」

そう言っただけで遠藤は足早に最後の階段を上がっていく。

でも俺は、それに続くことが出来なかった。腿が上手く持ち上げられない。そしてまだ膝は笑ったままだった。

ほどなくして俺は、またしても教頭に腕をつかまれた。

「遠藤さん！ 待ちなさい」

階段上で振りかえった遠藤は教頭と捕まった俺を見て悔しげに拳を握った。

「高井君……勝ったじゃないですか」

「そうだとしても。こんな無駄を見過ごすわけにはいきません！ 遠藤さんあなたが今しようとしていることがどういふことか分かっているんですか！」

「……どういうことですか？」

真っ直ぐに教頭を見る遠藤の顔は逆光のせいでよく見えなかった。「今戻れば遠藤さんの経歴に傷は付きません。実際危険な接触を行ったわけでもない。一時的に授業を抜けたのも体調不良として収めることが出来ます。ですがそこから出て、そのままこの時間の授業を抜けてしまったらそれはもう問題を起こして抜けたと、そういう扱いになります。それがどういうことか分からないあなたではないでしょう？」

優しい語感で、それでいてまくしたてるように続ける。

「あなたのためを思っただけです。遊びたいこと、やりたいたいこと、今だけ我慢すれば後で何でも出来るんですよ。今だけの辛抱なんです。遠藤さんなら推薦でどこにだって送り出せます。だから今戻れば」

「今の私には、もう」

遠藤は言葉を止め、それから一度俺を見た。そして、

「要らないわそんなもの」

きっぱりと言い放った。

「……高井君を離してください」

「そうはいきません。そもそも走り勝ったことが授業の免除になるなんてことはありません。彼にはしっかりと接触についての説明と罰を受けてもらいます」

「うっ」

ひねられた腕に痛みが走り、情けなくも俺は悲鳴をあげてしまった。

「いいから高井君を離して！」

俺の悲鳴に反応した遠藤はそう叫んだ。

次に言葉を失うのは俺の番だった。

遠藤は、腰に差した黒板用のコンパスを大仰な動作で引き抜くとそれを掲げ、あろうことか階段から勢いよく飛び降りた。

そして数瞬の滞空の後、コンパスを教頭目がけて振り下ろした。

驚いた教頭は大きくバランスを崩し、俺をつかんでいた手を離す。響く重低音は遠藤の着地によるもの。

振り返ってみれば教頭の首元をコンパスが挟んでいた。

かかる重力に膝を折った遠藤は、教頭が硬直しているその隙に体勢を立て直し、続けて教頭の首を挟んだままのコンパスを驚くほど豪快なスイングで振り抜いた。

その一撃で教頭は背中から踊り場に倒れた。

再び鳴り始める警笛。

「行こう。高井君」

鳴り響く警笛に、遠藤はもう驚いたりしなかった。

教室を飛び出した時とは逆に、遠藤は俺の手をつかむと再び最後の十数段を登り始める。

俺は遠藤に引かれ、満身創痍ながらも一つ一つ確かに段を上がっていく。

「取り押えなさいっ！」

コンパス攻撃から立ち直った教頭の声が響いた。それを合図にたくさんの足音が鳴り渡る。

残るはわずか五段だった。

迫る足音に焦りを感じた俺の足は、いよいよおぼつかなくなり、着地点が落ちつかない。

残り四段。

しまった！ 左足が段を越えきれず引つ掛かった。傾ぐ身体。空いた方の手でどうにか持ちこたえ、何とか、どうにか次の一步を着く。

残り三段。

その気配が真後ろまで迫るのを感じる。まるで夢の中のように俺だけがスローモーションの魔法を掛けられたみたいでもどかしい。

残り二段。

遠藤がドアを開けたのが見えた。同時にワイシャツの裾が教師につかまれた。

あと、一段っ！

裾をつかんだ誰かの手を振り払い、俺は最後のドアに飛び込んだ。

屋上には一面の『青』が広がっていた。

盛夏を目前に控えた太陽は燃え盛り、眩しくて目を開けてもらえない。

俺は飛び込んだ衝撃を殺せず無様に屋上の地をすべった。遠藤が外から鍵を掛けるのを確認してから、どうにか反転して大の字になる。

今はとにかく酸素が欲しかった。

無限に広がる夏空。早鐘を打ち続ける鼓動に任せて俺は肺を満たす。

天高く行く飛行機の音が聞こえてくる。肌がチリチリと焼けるのを感じる。何だかそれがとても心地良い。

俺は呼吸が落ち着くまでその心地良さに身を任せることにした。

「……何だよあのコンパスの使い方は。あんな使い方、普通は思いつかないぞ。しかも話が通じないから力づくで、とか」

ドアを叩く音、続けて何やら叫ぶ声が聞こえる。俺はそれを見捨て続ける。

「遠藤の方がよっぽど不良だよ」

「そうかしら？ でも確かにずっとドキドキが止まらなかったわ。センスがあるのかしら」

遠藤はゆっくりと屋上を囲う金属製の手すりまで進み、広がる風景を見渡していた。

「気持ち良い。こんなに大きな空を見たのは初めてだわ」

遠藤は眼鏡を外し、大きく深呼吸した。

それからゆっくりと空を仰ぐ。

「結局どうしてエスケープなんてしようと思ったんだ？」

「……私、やりたいことがあるの」

遠藤の告白は涼やかな風に乗って耳元へと運ばれてくる。

「でもそれを選んだら今までの無遅刻、無欠席、無早退の生徒会長なんて肩書き、全部意味がなくなるの。だから皆に反対された。そんな無駄なことはするな。って」

それはきつと誰だつてそう感じるだろう。遠藤の優秀さは、ほとんど会話したことのない俺にまで届いているくらいなんだから。近くににいる人にならなさらだ。

「私、そう言われて言い返せなかった。ずっと真面目な会長でやって来たから。周りにもそうあることを期待されて、頑張つてそれに応えてきた。色んな事を我慢したの。本当はイタズラだつてしたかった、友達とどこかに遊びに行ったりもしたかった。それを我慢したから今の私がある。それなのに捨ててしまつて良いのかつて」

俺の聞いていた、あの高慢で狡猾な会長様としての遠藤梓は、その過程の中で生まれたものなんだろう。望まれた姿を守るために。

遠藤は手すりに両手を着いた。

「迷つてしまつていたの。自分にとって何が一番大事なのかつて。だから確かめたかった。最後までエスケープ出来るか。それとも今の自分を守るのか」

「自分の思いを確かめるためのエスケープだったわけか」

「ええ。この無駄は私にとって、何が大切かを気付かせてくれた」

遠藤にとつてもエスケープで生まれた無駄は無駄じゃなかったつてことか。

「これがもしも、天秤に乗せて悩めるほど積み重ねじゃなかったら、私はこんなに強く決心出来ていないと思うわ。傷一つない優等生の評価を無駄にすることで、私は迷いを断ち切れた」

「……まあ結果としては俺にとつても意味があつたけど、そんな重要なことに口々に話したこともなかった俺を平気で巻きこむ辺りは、会長様つて感じだぞ」

ちよつと皮肉を込めて言つてやる。

「そうね。ごめんなさい」

それだつて言うのに遠藤はまた、素直に謝った。
「でも」

なぜか遠藤は三步ほど後退し、助走を付け　。

その手に持った眼鏡を大胆なフォームで大空に向けて投げ捨てた。
遠藤の手元を離れた眼鏡は抜けるような青空を、陽光を反射させながら飛んで行った。

そして振り返った素顔の遠藤の笑顔は、

「高井君で良かった。ありがとう」

鳥肌が立つくらい、まぶしかった。

怒ったり、泣いたり、笑って見せたり、きっとこれが本当の遠藤梓なんだろう。そしてその遠藤が選んだ道ならきつとそれが正解なんだろう。

「それで、遠藤のやりたいことって何なんだ？」

どういうわけか遠藤は目をそらした。

「……笑わない？」

「笑わねえよ。これだけの苦勞をして勝ちとったエスケープだからな」

「本当ね？」

「本当本当」

こんなところに誰もいるはずなのに、遠藤は視線を忙しなくさまよわせた。

「ケ……さん」

「はい？」

「ケ……さん」

「なに？」

「ケーキ屋さん！　何度言わせるのよ！」

噴き出しそうになる俺に突き刺さる視線。

いや遠藤の口から「　屋さん」は予想外過ぎるっ。

ここ数十分で色んな表情を見てきたからまだ堪えられたけど、突

然だったらアウトだったな。

「もちろん戦略だってあるわ。男の人でも最近甘いもの好きな人が多いでしょ。入りこみにくい女性の市場に男性を巻き込むことができれば圧勝だわ」

その目は野望に燃えていた。……ざっくりした作戦だけど遠藤ならやってみせるのだろ。そんな気がした。

「そう言う高井君はどうするのよ」

「俺か……俺は」

そんなこと考えたことがなかった。でも自然と一つの案が浮かび、俺自身それが正しいことのように思える。

「今度こそ部活をしようかな」

体育型との勝負に俺は勝った。でも百メートルない廊下という特殊な環境は、実際の物とはまた違うのかもしれない。でもこの事は俺にとっては光明だった。今度は胸を張って限界に挑もう。

「そう。でも進学するのであれば正直、高井君の成績では厳しいんじゃないかしら」

……確かに。何をどこから始めて良いのかすらも見当がつかないな……。

三年間の怠惰はしかし、そう甘くはなかった。

「どう？ それなら私が教えてもいいわ」

「はい？」

急な提案に戸惑ってしまう。確かに学年トップの遠藤なら適役だろうけど。

「ま、まあ助かるは助かるけど」

「契約完了。受験は夏が勝負。夏休みはないと思って。そうそう。教える代わりに色々味見役お願いね」

遠藤はしてやったりとばかりに余裕の笑みを見せた。

……やられた。

目的のためなら狡猾になる。それは遠藤梓の地の一つだったというわけだ。

こうして、またしても一方的に契約を取りつけられてしまったところで、四時間目終了のチャイムが鳴り響いた。

「終わったな」

昼休みが始まり、にわかに校舎内がざわめき始める。

「もう諦めたのかしら。ドアを叩く音がいつの間になくなっていくわね」

確かに。教師陣にも仕事があるから、あの人数をここに置いておくわけにもいかないのだろう。それでも誰もいないってことはさすがにないと思うけど。

「さて、それじゃあそろそろ謝りに行かないとな。でもその前に」
腹が盛大に鳴った。俺はポケットから大盛りカレー券を取り出す。
「出来れば……先に腹ごしらえで」

これで晴れて、気兼ねなくこの食券を使えると言うものだ。

「空腹のまま土下座するのと、ちゃんと飯食った状態で土下座するんじゃ、わけが違うからな」

「ふふ。そうね」

でも、そうなれば当然、今度は教師たちに捕まらずに食堂まで行かなければならないわけだ。それも上履きがないまま。まあ、それは後で探しに行こう。

俺は、ようやく落ち着いてくれた脚を何度か屈伸して感触を確かめる。

遠藤はそろりそろりと気配を消すように歩き、ドアの前に立った。俺も後に続いてそつとノブに手を掛け、鍵を静かに開ける。

……ここまでは大丈夫。

でも階段には仁王立ちの体育型が待ち構えているかもしれない。たくさんの障害が待ち受けているのかもしれない。

そして今日の事も、これから起こる数々の事も、いつかまた無駄だったと思う時が来るのかもしれない。

それでも、やれるだけ、行けるだけ行つてやろう。

目配せすると、遠藤は笑顔でうなずいた。

そして。

「S e t……」

今から始まる新しい日々に向かって。

「R e a d y……」

俺は勢い良くドアを開け放った。

「G o ! !」

（後書き）

はじめまして。高嶺と申します。

この度は「時速33キロのエスケープ」を読んで頂いてありがとうございます。ございました。

本作では「青春」「無駄」「迷い」なんて言うものを命題に楽しんでいただき、最終的にすっきりとして頂ければと思いながら書きました。

どうにも昔から青春は「走るもの」という印象がありまして、今回はそれが全面に出た形だなあと感じます。

当時は全力で走るなんてことはなかなかしませんでした。今にして考えてみると思いつきり端から端まで廊下を走って、先生や委員長のような人たちに怒られてみたかったなあ。なんて思う次第です。と言うわけであとがきを終わろうと思います。

重ねて「ありがとうございました」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6649/>

時速33キロのエスケープ

2010年10月8日11時55分発行